

# 2014年度 入試概要分析

各大学の2014年度入試の概要がこの夏にほぼ出揃った。変更点を中心に来春入試概要の分析と、8月に実施された第2回全統マーク模試の志望動向をあわせてお伝えする。

## ◆大学志願者数は今春から一転して減少の見込み

来年の入試概要を見る前に、8月に文部科学省より公表された「平成25年度学校基本調査速報」から、大学志願者数の推移を確認しておこう。【図表1】は、2000年以降の18歳人口・新規高卒者数および大学志願者数・入学者数の推移をまとめたものである。

2013年度は、18歳人口が前年から4万人増（3.4%増）と近年にない増加を見せた年であった。これに伴って現役の大学志願者数は前年から1万8千人増（3.1%増）と大きく増加した。既卒の大学志願者数はやや減少したものの、大学志願者数は67万9千人と現卒あわせて前年から1万4千人増（2.2%増）となった。

ここで注目したいのは、現役生の大学志願率（高校卒業生数に占める現役大学志願者の割合）である。今年の大学志願率は、前年から0.12ポイントダウンの54.92%となった。志願率は2010年度の55.68%をピークにここ3年は僅かながら低下が続いている。

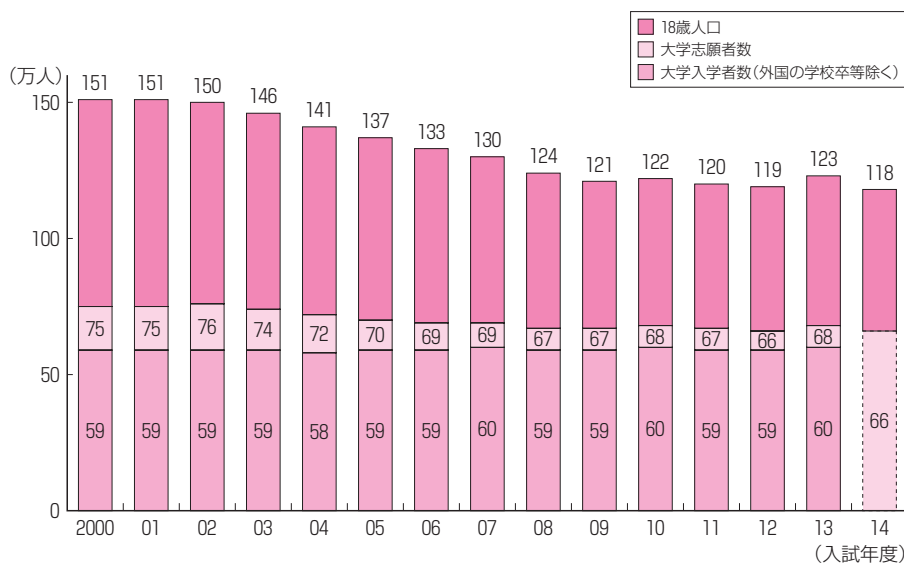
振り返れば、1990年に35%であった大学志願率は、1990年代、続く2000年代に右肩上がりの状況を示し、この20年間で20%ほど上昇した。この志願率の上昇に加えて、短大の4年制化などを含め250以上の大学が新設され、多くの大学で学部の増設・改組や入学定員増が行われてきたこともあり、いわゆる大学のユニバーサル化は急速に進んできた。しかし、伸び続けてきた大学志願率もいよいよ頭打ちの状況と見るべきだろう。

大学志願率が頭打ちになると、18歳人口の増減はそのまま大学志願者数の増減に直結する。来春以降、18歳人口は120万人を超えることはなく基本的には減少基調を示す。特に2018年度を過ぎると再び急速な減少期を迎える。これにより、大学入試はさらなる競争緩和が見込まれる。一方、受け入れる側の大学・学部の新設や入学定員増に

よる規模拡大は止まりそうにない。2013年度入試では大学入学者数が増加し、定員充足率は前年から1.2ポイント上昇の105.3%となったが、数年後には100%を割り込むことも十分に考えられる。

さて、現在の高3生が受験する2014年度の状況であるが、18歳人口が一転して約5万人減少（4.1%減）する。大学志願者数も同様に減少する見込みだ。河合塾では大学志願者数は約2万人減の66万人程度になると予測する。

【図表1】大学志願者数・入学者数の推移



入試年度	18歳人口	高卒者数	大学志願者数			大学定員	大学入学者数	定員超過率
			全体	現役 (志願率)	既卒			
2000	1,510,994	1,328,940	745,199	599,950 (45.15%)	145,249	535,445	587,142	112.0%
2001	1,511,845	1,327,109	750,324	615,475 (46.38%)	134,849	539,370	588,871	112.0%
2002	1,502,711	1,315,079	756,333	622,346 (47.32%)	133,987	543,319	590,845	112.2%
2003	1,464,800	1,281,656	742,934	606,116 (47.29%)	136,818	543,818	586,749	111.2%
2004	1,410,679	1,235,482	722,219	585,763 (47.41%)	136,456	545,261	580,456	109.7%
2005	1,365,804	1,203,251	699,732	578,295 (48.06%)	121,437	551,775	586,296	109.4%
2006	1,325,522	1,172,087	690,615	586,314 (50.02%)	104,301	561,959	587,512	107.3%
2007	1,299,971	1,148,108	689,673	595,040 (51.83%)	94,633	567,123	597,219	108.2%
2008	1,237,294	1,089,188	670,371	582,723 (53.50%)	87,648	570,250	589,552	106.5%
2009	1,212,499	1,065,412	668,590	584,908 (54.90%)	83,682	573,143	589,942	106.2%
2010	1,215,843	1,071,422	680,644	596,570 (55.68%)	84,074	575,325	598,827	107.6%
2011	1,201,934	1,064,074	674,696	589,203 (55.37%)	85,493	578,427	593,845	106.0%
2012	1,191,210	1,056,387	664,334	581,372 (55.03%)	82,962	581,428	588,662	104.1%
2013	1,231,117	1,091,617	678,820	599,492 (54.92%)	79,328	583,518	599,239	105.3%

※文部科学省学校基本調査より(大学定員は「全国大学一覧」より) ※グラフ中の2014年度大学志願者数は河合塾推定  
 ※現役志願率:高卒者数に占める現役大学志願者の割合 ※定員超過率:大学入学者数÷大学定員  
 ※大学入学者数は高校卒以外(外国の学校卒等)を除いた値を掲載。定員超過率は全入学者で算出

# 国公立大学編

## ◆前期募集人員は160名増加 後期・AO・推薦は募集人員減少

【図表2】は国公立大の募集人員の変化を選抜方法別にまとめたものである（河合塾調べ）。

国立大の募集人員は全体で前年から65名減少している。これは、北海道教育大、秋田大などで改組に伴う入学定員の減員を予定しているためだ。一方、公立大では、大学の新設が2つ予定されているほか、一部大学の入学定員増もあり、全体の募集人員が211名増員の見込みである。

選抜方法別に見ると、前期日程は160名増となるものの、後期日程で30名減、AO入試で33名減、推薦入試で3名減となる。

2014年度入試の特徴として挙げられるのが、国立大を中心にAO・推薦入試の廃止や縮小が目立つことだろう。その要因の1つは、AO・推薦入試においても学力把握措置の徹底が求められるようになったなかで、当該入試では合格者の学力の担保を十分にできないという判断であろう。国公立大でのAO入試は導入から10年が経過し、その成果を振り返る時期を迎えている大学が多い。一部、新たにAO入試を設定する大学もあるが、上記の理由によりここ数年は廃止・縮小の動きの方が活発である。

2014年度入試では、群馬大（理工－化学・生物化学）、東京海洋大（海洋科学－海洋環境）、金沢大（理工－機械工・電子情報）、鳥取大（農－共同獣医）、長崎大（医－医）などでAO入試が廃止される。また、推薦入試においても、熊本大（理－理）、琉球大（教育－生涯－自然環境科学）などで廃止されるほか、山梨大（工）、名古屋大（理）、徳島大（工－夜間主）、高知工科大（システム工、環境理工）では募集人員を10名以上一般入試へシフトする。

2006年度以降続いていた後期日程の廃止の動きは収束しつつあるものの、来春も一部の大学で後期日程の廃止が行われる【図表3】。医学科では岡山大、九州大の2大学の後期日程が廃止される。これにより、後期日程を実施する国公立大医学科は50大学中26大学と約半数となる。このほか、鳥取大（医－医、医－保健－看護）や鳥取環境大などでは、後期日

【図表2】国公立大 選抜方法別募集人員の変化

		国立大			公立大			国公立大		
		2013年度	2014年度	前年差	2013年度	2014年度	前年差	2013年度	2014年度	前年差
一般選抜	前期日程	64,969	65,037	+68	14,793	14,885	+92	79,762	79,922	+160
	後期日程	15,944	15,932	-12	3,571	3,553	-18	19,515	19,485	-30
	中期日程	—	—	—	1,933	1,933	0	1,933	1,933	0
	別日程	—	—	—	280	315	+35	280	315	+35
	AO入試	2,791	2,748	-43	437	447	+10	3,228	3,195	-33
	推薦入試	12,042	11,946	-96	7,050	7,143	+93	19,092	19,089	-3
	その他	649	667	+18	316	315	-1	965	982	+17
	計	96,395	96,330	-65	28,380	28,591	+211	124,775	124,921	+146

※数値は河合塾調べ

【図表3】後期日程を廃止する大学(学部・学科)

筑波大(社会・国際－国際総合)  
埼玉大(教育－養護教諭)  
静岡大(教育－学校－国語)  
岡山大(医－医)  
九州大(医－医)  
福岡教育大(教育－芸術－美術)  
※後期日程のみの実施から前期日程のみの実施へ変更  
熊本大(薬)

程の募集人員の縮小が行われる。周辺大を含めた志望動向の変化に注意したい。

一方、後期日程へ募集人員をシフトする大学もある。茨城大（工－A）では、学部全体の後期募集人員を前年の87名から112名に増員する。岡山大（環境理工－環境デザイン工）では後期日程を9年ぶりに復活する。

## ◆新課程入試を控え大掛かりな入試変更は影を潜める

次に個々の大学の入試科目や選抜方法の変更点について見ていこう。

2014年度入試は、2015年度からの新課程入試を1年後に控えていることもあってか、ここ数年と比較すると入試変更は少ない。その意味では変更の少ない落ち着いた入試になりそうだ。

ここでは、難関大の入試変更について確認した後、地区別に主な選抜方法の変更点を見ていこう。

### ①難関大の入試変更

近年、難関大では、北海道大、東京工業大などの大掛かりな入試改革や後期日程の廃止・縮小が相次いだ。2014年度入試では一部の大学で入試変更が行われるものの、受験生の志望動向への影響を及ぼしそうなものは少ない。

東京大では、前期日程の外国語の選択方法に変更が行われる。これまでは出願時に届け出た「英語」「ドイツ語」「フランス語」「中国語」の4言語の問題の一部分を、「英語」「ドイツ語」「フランス語」「中国語」「ロシア語」「スペイン語」「韓国朝鮮語」の7言語から試験場で選択した1つに代えることが可能であった。

しかし、来春入試からは、試験当日に問題の一部分を他外国語に代えることができるのは「英語」選択者に限られ、選択できる言語から「ロシア語」と「スペイン語」が外れた。

名古屋大では、理学部で募集人員の変更が行われる。推薦入試の募集人員を60名から50名に減員し、減員分は前期日程に割り当てる。前期募集人員は210名から220名に増員となる。

大阪大では、医学部の第1段階選抜の実施条件が変更される。「3倍を超えた場合」という条件に加えて、「900点満点中630点以上」というセンター試験の点数条件が加わった。なお、同様に大阪市立大の医学部（前）においても、これまでは「5倍を超えた場合」を実施の条件としていたが、来春は「900点満点中650点以上」という点数条件に変更される。ただし、両大学の合格を狙うのであれば、設定された点数を軽くクリアする力は必要だろう。

九州大では前述の医学部の後期日程廃止に加えて、法学部（前・後）のセンター試験科目に変更がある。2012年度よりセンター試験で地歴と公民が同時間帯で実施されるようになったのに伴い、当該学部では全国で唯一公民の選択を認めず地歴Bから2科目を必須とした。これは、国立大学協会が「センター試験で地歴と公民から2科目を選択させる場合、教科を問わずに選択させることが望ましい。地歴からの2科目選択は、センター試験と2次試験の組み合わせ、または2次試験において実現するべきである。」とした基本方針に反するものであった。来春入試ではこれが改められ、「倫理、政治・経済」を選択科目に加え、地歴Bおよび「倫理、政治・経済」から2科目となり、一般的な難関大文系学部と同様の選択科目へ変更される。

## ◆その他の入試変更

続いて、地区別に選抜方法の主な変更点を見ていこう。なお、一般入試の変更点は下記を含め41ページからの「2014年度 入試変更点一覧」に掲載しているので、あわせてご活用いただきたい。

### ①北海道・東北地区

室蘭工業大（工（昼間））：センター試験を課す推薦入試を新設

福島大（人文社会－人間発達文化）：募集区分を細分化する。前期は専攻別募集からさらに細かいクラス別募集に、後期は学類一括募集から専攻別募集となる

### ②関東・甲信越地区

茨城大（工）：募集人員を後期日程へシフト、センター試験 数学Ⅰ、数学Ⅱを選択科目から除外

宇都宮大（農－農業環境工－前）：2次試験 理科を選択科目から除外

埼玉大（教養、経済、教育－前）：センター試験 理科総合 A・Bを選択科目から除外

首都大学東京（都市環境－地理環境－前・後）：センター試験 6科目→7科目

（システム－インダストリアルアート－後）：2次試験 面・（小・実→1）→数・実

東京医科歯科大（歯－口腔保健工学－前）：センター試験 理科2→1科目、2次試験 小論文増

都留文科大（文－比較文化－中）：センター試験 選択科目の地公から少なくとも1科目の選択が必要になる、

2次試験 小論文減

信州大（教育－前・後）：センター試験 一部のコースを除き科目数減、2次試験 多くのコースで変更あり

（医－医－前）：2次試験 英語増、小論・面接の点数化

### ③東海・北陸地区

金沢大（医薬保健－放射線技術科学・検査技術科学）：推薦入試 新たにセンター試験を課す

福井県立大（経済－前）：センター試験 2科目→3科目（国語増）

（生物資源、海洋生物資源－前）：2次試験 理科で物理を選択科目から除外

岐阜大（工－前・後）：2次試験 英語増

（医－前・後）：2次試験 面接増、2段階選抜 前期は新たに15倍で実施、後期は実施倍率を40倍→15倍に変更

静岡大（人文社会科学－言語文化－後）：センター試験 7科目→4科目

静岡県立大（看護－前・後）：センター試験 5科目→6科目（数学1→2科目）、2次試験 前期は小→英、後期は面接増

※看護学部は、短期大学部看護学科の4年制化に伴い入学定員が55名から120名に増員される

浜松医科大（医－後）：新たに2段階選抜（15倍）を実施

愛知県立大（外国語）：新たにセンター試験を課す全国枠の推薦入試を実施

三重大（医－看護－前）：2次試験 国語減

三重県立看護大（看護－前）：2次試験 教科数増（英語が数学・国語との選択から必須になる）

### ④近畿地区

京都工芸繊維大（工芸科学－デザイン・建築学－前）：センター試験 6科目→7科目（理科1→2科目）、2次試験 1教科（理科or総合問題）減

兵庫県立大（環境人間－前・後）：センター試験 公民で現代社会が選択科目に加わる

### ⑤中国・四国地区

鳥取大（地域－地域環境－前）：2次試験 理科が選択科目に加わる

（農－共同獣医－前）：2次試験 総合問題→学科試験（英語・理科）

（医－保健－前・後）：センター試験 公民で「現代社会」「倫理」「政治・経済」が選択科目に加わる

岡山大（環境理工－環境デザイン工）：新たに後期日程を実施

（医－医）：前期日程の地域枠および後期日程を廃止、新たにセンター試験を課す地域枠の推薦入試を実施

広島大（医－医）：後期日程のふるさと枠を廃止し、推薦入試のふるさと枠を増員

下関市立大（前）：福岡会場を新設

高知県立大（社会福祉、看護－前・後）：センター試験 英語でリスニングの成績を利用へ



## ⑥九州地区

北九州市立大（経済一前）：センター試験3教科型を廃止

福岡教育大（教育一初等一技術ものづくり）：新たに前期日程を実施

（教育一芸術一美術）：後期日程のみの実施→前期日程のみの実施

※福岡教育大ではこのほかにも募集人員の変更や科目の変更がある

佐賀大（理工一電気電子工一前・後）：2次試験 化学が選択科目に加わる

（医一前・後）：センター試験 公民で「倫理、政治・経済」が選択科目に加わる

熊本大（医一医一前）：2次試験 面接増、2段階選抜倍率10倍→5倍

鹿児島大（工、農一前）：東京会場を廃止

## ◆大学の新設、学部・学科の新設・改組

次に新增設や改組・再編の動きについてまとめておく。

### ①大学の新設

大学の新設は山形県立米沢栄養大と敦賀市立看護大の公立2大学が予定されている。

山形県立米沢栄養大は、山形県立米沢女子短大の健康栄養学科を4年制化するもので、健康栄養学部健康栄養学科（入学定員40名）のみの単科大である。近隣の青森県立保健大にも栄養学科が設置されているが、栄養系の学科を設置している国公立大は少ないため、初年度から注目を集めそうだ。募集は一般入試（募集人員28名）と推薦入試（同12名）で行われる。

敦賀市立看護大は福井県敦賀市に設置予定の単科大で、県内では福井大、福井県立大に次ぐ3つ目の国公立大看護学科の設置となる。入学定員は50名で、募集は一般入試（募集人員35名）と推薦入試（同15名）で行われる。なお、2014年度の一般入試は、他の国公立大の前・中・後期日程とは別の枠組みの入試となる。試験日は3月8日で公立大中期日程と重なっているが、その他の日程の大学とは併願が可能である。センター試験は課されず大学独自試験（英必須、数・国から1科目）のみで実施される。

### ②学部の新設・改組

学部の新設・改組は3大学で予定されている。

秋田大は全国唯一の名称であった工学資源学部を、国際資源学部と理工学部の2学部へ改組する。入学定員は工学資源学部460名に対し、国際資源学部（120名）と理工学部（395名）で計515名となる。国際資源学部は、既存の地球資源学科をベースに設置され、1学科3コースから成る。新たな資源技術や資源・エネルギー戦略の発展・革新を担う人材の育成をめざすとしている。地球資源学科以外の既存の7学科は、理工学部として4学科9コースに再編する。なお、両学部とも募集はコース別に行われる。

千葉大は法経学部（法学科、経済学科、総合政策学科の3学科）を法政経学部法政経学科へ改組する。法政経学科ではコース制が導入され、2年次より4つ（法学、経済学、経営・会計

学、政治学・政策学）のコースに分かれることになる。2014年度入試の募集は改組前の学科で実施されるが、志望するコースに対応した学科での受験が必要となる。

長崎大では、国際社会で活躍できる人材の育成をめざした多文化社会学部を新設する。学部内には4つのコースが設置され、「グローバル世界」「オランダ特別」の両コースでは、半年から1年間の留学が必須となる予定だ。また、一般入試は2段階選抜を実施し、第1段階選抜ではセンター試験の外国語（前期は得点率80%以上、後期は同85%以上）や英検やTOEFLなどで一定以上の成績を収めたものという条件が設定されている。こうした特定教科の成績をもとにした第1段階選抜の実施は他になく注目される。なお、多文化社会学部の設置に伴い、経済学部で90名、環境科学部で10名の入学定員が削減される。

### ③学科・課程の新設・改組

北海道教育大では、函館校と岩見沢校内の各課程を、各校舎1学科に再編する。注意したいのは、改組に伴う募集人員の変更である。函館校は入学定員が330名から285名に減員する。一方、教員養成課程である札幌校の入学定員を250名から270名に増員する。大学全体では25名の入学定員減となる。

近年、こうした教育学部の総合科学課程の縮小や教員養成課程への募集人員のシフトが相次いでいるが、来春は北海道教育大のほか、秋田大、三重大でも行われる。

秋田大（教育文化）では、前述の工学資源学部の改組に連動して、教育文化学部の入学定員を290名から210名に減員する。現在の地域科学、国際言語文化、人間環境の3課程を地域文化学科へ改組するとともに、入学定員も3課程計190名であったのを、地域文化学科は100名とする。なお、学校教育課程は10名増となる。

三重大（教育）では、情報教育課程と生涯教育課程を募集停止し、学校教育教員養成課程に情報教育専攻を設置する。学校教育教員養成課程の入学定員は35名増員され180名となる。

このほか、奈良女子大では、全学的な学科改組が行われる。生活環境学部には、文学部の人間科学科の一部を移管した心身健康学科と、理学部の情報科学科の一部を移管した情報・衣環境学科を新たに設置する。また、理学部は既存の5学科を2学科6コースに再編する。学科により、コース別募集や入試科目型別募集を行うなど募集区分がやや複雑なので、志望者には改組の内容とあわせて選抜方法についてもきちんと確認させたい。

徳島大（医）では栄養学科を医科栄養学科へ改組し、より臨床栄養に強い学生を育てるとしている。なお、これまで通り栄養士および管理栄養士の受験資格は取得できるものの、2014年度入学者から栄養教諭科目は開講されず、栄養教諭への道はなくなる。

## ◆第2回全統マーク模試からみた志望動向

最後に、この夏に行われた第2回全統マーク模試のデータをふまえて、来春入試の動向を予測してみよう。

第2回全統マーク模試における国公立大全体（前期日程）の志望者数は前年比96%と減少している。受験人口そのものの

減少が見込まれることから、来春入試では模試動向どおり国公立大志願者数は減少する可能性が高いだろう。

【図表4】は、難関10大学の志望動向を見たものである。難関10大学全体の志望者数は前年比96%と国公立大全体と同様に減少している。大学別では、**東京工業大**が前年比104%と増加しており、近年の理系人気を背景とした人気継続がうかがえる。一方、2013年度入試で大幅な志願者減となった**東京大**は、前年比93%と他大学と比べて減少率が高く、人気の回復は見られない。

【図表5】は、学部系統別の動向を見たものである。「生活

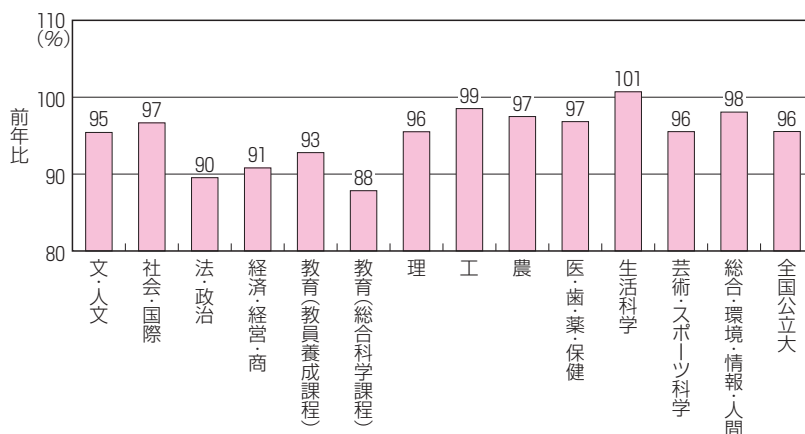
科学」系を除いて、志望者が増加している学系はない。ただし、近年の「文低理高」という大きな傾向は継続しており、理系学部の方が比較的減少率が低い。文系では、「法・政治」学系が前年比90%、「経済・経営・商」学系が同91%と1割近く減少しており、近年の社会科学系不人気は続いている。理系では今春入試で志願者の増加が目立った「工」学系が同99%と前年並みに留まっている。また、難関の医学科も同100%と模試受験者数が減少するなかで、人気を維持している。

入試動向に関する詳しい分析は、本誌12月号で入試直前動向分析としてご報告する。

【図表4】国立難関10大学 前期日程志望者数 (第2回全統マーク模試より)

大学名	昨年	今年	前年比
北海道	5,490	5,181	94%
東北	5,912	5,832	99%
東京	6,893	6,391	93%
東京工業	2,548	2,648	104%
一橋	2,667	2,549	96%
名古屋	8,750	8,429	96%
京都	7,096	6,955	98%
大阪	8,974	8,483	95%
神戸	9,778	9,587	98%
九州	5,999	5,629	94%
難関10大計	64,107	61,684	96%
その他国公立大計	186,446	177,690	95%
国公立大全体	250,553	239,374	96%

【図表5】国公立大前期日程 学部系統別の志望動向 (第2回全統マーク模試より)



# 私立大学編

## ◆受験生への負担軽減の動きが拡大

新課程入試を翌年に控える来年度入試では、入試制度や入試科目の変更は例年と比べると比較的少ないが、受験生に対する経済的支援や負担の軽減につながるような動きが目立つ。

その1つが奨学金制度の新規実施や拡充である。**早稲田大**では奨学金の採用者数を約500人から約1200人に大幅に増員する。**中央大**と**立教大**でも新規の奨学金制度を実施する。この3大学の奨学金制度は首都圏出身者以外の受験生が利用でき、入試合否決定前に採用が分かるため、入学手続きがしやすくなる。

一方、入試においては、受験料の割引の導入や拡大が目立つ。**法政大**では、新たに割引制度を導入する。一般方式のT日程(統一入試)は複数学部での併願が可能になり、併願時には受験料が割引となる。

また、**工学院大**、**東京工科大**、**東京電機大**、**摂南大**では、インターネットによる出願(ネット出願)による受験生を対象とした受験料の割引を行う。ネット出願は、ここ数年で急速に拡大しており、来年度入試では**東北福祉大**、**東京都市大**、

**中部大**、**神戸学院大**、**福岡大**などで新たに導入される。ネット出願は、24時間の出願が可能で、大学によっては願書請求が不要、出願書類作成の不備が画面入力時に判明するなど受験生のメリットも多い。大学にとってもペーパーレス化による印刷費の削減や願書受付業務の軽減が期待できることから、ネット出願のみとする動きもある。来年度入試では**東洋大**、**武蔵野大**、**中京大**、**近畿大**では一般入試の出願はインターネットのみでの実施となる。なお、受験料の割引の有無は大学により異なるが、割引制度をあわせて実施した新規導入校では大幅な志願者増になったケースも多く、志望動向には注意したい。

## ◆地区別、入試変更トピックス

全体的には入試の変更は少ないものの、大学によって入試方式を大きく変えるところもある。ここでは来年度入試の変更を各地区の主要大を中心にまとめた。

## ①北海道・東北地区

**北海道医療大**では今年4月に開設されたりハビリテーション科学部で、来年度入試からセンター利用方式を導入する。方式は他学部と同様の前期A、前期B、後期の3回実施で、入試科目は全方式ともオーソドックスな3教科型である。大学名称の変更と学部の大幅な改組を予定している**北海道科学大**(現 北海道工業大)では入試方式にも変更がある。2月後半に実施する一般方式の中期入試をセンター方式へ移行する。また、**北海学園大**では昨年の社会科学系学部につき、人文学部でもセンターⅡ期を導入し、受験生の受験機会の拡大を図る。

東北地区では**東北生活文化大**がセンター利用方式を新規実施する。A・B日程の2回実施で、出願は1月末と2月末である。入試科目は学科により異なるので入試科目一覧を参照していただきたい。一般方式では3月中旬にC日程を実施する。**石巻専修大**でも今春新設の人間学部でセンター方式を導入、全学部で新たにセンター併用方式を導入する。

他の変更としては、**盛岡大**で募集単位の変更がある。文学部児童教育学科を学科単位の募集から児童教育コース、保育・幼児教育コースの2コースでの募集に変更する。

## ②関東(東京除く)・甲信越地区

**千葉工業大**では全学科でセンター方式に中期を導入する。入試科目は(英・国→1、数・理→1)の2教科で、出願締切は2月中旬に設定されている。**城西国際大**では全学部で一般方式にD日程を追加、文系学部のセンター方式を1・2期の2回実施から1~4期の4回実施に拡大する。

**関東学院大**の看護学部ではセンター方式を導入する。前・後期の実施で、前期は英・国・数・理の4教科、後期は英・(数・国→1)・理の3教科でセンター試験の成績のみで合否判定が行われる。また、一般方式との併用型入試も導入し、大学独自試験：英・国、センター試験：理科で判定を行う。**上武大**ビジネス情報学部では1月実施の統一入試をⅠ期に改称する。2月に実施していた総合問題を課す総合入試は廃止し、2教科型のⅡ期に改める。同様に看護学部でも統一入試をⅠ期に改称し、新たにⅡ期(2教科型)を導入する。両学部ともⅠ期では学外に初めて試験会場を設け、センター方式には中期を導入し実施回数を拡大する。

この地区のトピックとしては新潟県の**長岡造形大**が来年度の4月から公立大への移行を予定している。

## ③東京地区

**早稲田大**の基幹理工学部が学部一括募集から学系募集に変更する。志望する学系により2年次に進級する学科が限定されるので注意が必要である。学系Ⅰからは数学、応用数理学科、学系Ⅱからは応用数理、機械科学・航空、電子光システム、情報理工、情報通信学科、学系Ⅲからは情報理工、情報通信、表現工学科に進級できる。また、学系ⅠとⅢでは理科で生物が選択可能となる。学系Ⅲは得意科目選考(指定科目で優れた能力を示したと判定された受験生を合格とする制度)の対象にもなる。人間科学部ではセンター方式と個別試験を併用する数学選抜方式が新たに導入される。この方式は既設のセンター方式と同じ科目に加え個別試験で数ⅡB(ⅢCも可)を課す。センター試験140点個別試験560点とセンターの成績の配点比率が低いため、個別試験での逆転が十分に可能とい

える。**慶應義塾大**の経済学部では方式や入試科目に変更はないものの、募集人員の減員がある。英・数・小論のA方式が500名→480名の20名減、英・地歴・小論のB方式が250名→240名の10名減となる。

**日本大**では国際関係、法、商、工、生産工、理工、歯、松戸歯、薬、法第2部の10学部でN方式第1期を導入する。このN方式は同一試験日、同一問題で実施され、複数の学部学科を併願することができる。第1期には学外試験会場が設けられ、全国16箇所の試験会場で受験が可能だ。

この他、入試方式に変更のある主要な大学は、**国際基督教大**がセンター方式を廃止し、センター方式の募集人員40名を一般方式へ振替える。**上智大**(文-英文、ドイツ文、フランス文)では学科諮問(各学科に即した試験科目)を廃止。**青山学院大**では、法学部のセンター4教科型と経済学部一般方式のB方式を廃止し、入試方式をシンプルにする。**明治大**(総合数理)、**法政大**(グローバル教養)はセンター方式を導入。**駒澤大**ではグローバル・メディア・スタディーズ学部でセンター中期を廃止する。

## ④東海・北陸地区

**南山大**では情報理工学部から名称変更を予定している理工学部が学部一括募集から学科募集へ変更する。従来は3年次進級時に所属学科を選択していたが、来年度から出願の段階で学科の選択をすることになる。入試方式については今春入試と変更はない。**中京大**の経済学部では一般方式の前期M2方式に理系型入試を追加する。この方式は数学ⅢCを必須とし、数学に強い受験生の獲得をめざしている。**金城学院大**では一般方式の成績上位100名を対象としていた奨学金制度を、センター方式前期の上位50名にも拡大する。**常葉大**はセンター方式に変更がある。保育学部は他学部同様に後期を実施し、今春新設の法学部法律学科、健康科学部看護、静岡理学療法学科では前後期とも導入する。また、一部の学部で実施していた中期は廃止され大学全体で前後期実施に統一された。

北陸地区では**金沢星陵大**がセンター方式の2月下旬出願のB日程を廃止し、3月出願のC日程はB日程と改称される。

## ⑤近畿地区

**関西大**では工学系3学部の学部個別日程に理科設問選択方式(2科目型)を導入する。既存の理科設問選択方式は、物・化それぞれ3問ずつ合計6問から3問を選択解答するのに対し、新たに実施する方式では物・化・生から志望する学科により指定された2科目を選択し、それぞれ3問ずつ計6問から4問選択解答をする。既存方式との違いは、理科2科目を必ず受験しなければならないことと、学科により生物が選択可能になることである。

**京都産業大**は、全学科で一般方式の中期日程を実施する。試験日は2月13日で3科目型。これに伴い、1月末から4日間実施していた前期の試験日が1日減り、3日間となる。この中期日程は前期日程同様、センタープラス方式の出願が可能である。また、外国語学部では一般方式の英語1科目型、専攻言語によりセンター後期2科目型を導入する。

**甲南大**では2月初旬に一般方式のE日程(全学部)とA日程(学部別)を実施し、その後にセンター併用方式のためにS日程を実施していたが、このE・A・S日程を前期日程に統



合し、すべての入試日でセンター併用を認める。また、これにともない3月実施のB日程を後期日程に改称する。センター利用方式では、経営、マネジメント創造学部で中期を廃止し、全学部共通の前・後期に変更する。また、文系学部では2科目型や4科目型などが実施されていたが、ほぼ全学科3教科3科目型に、理系学部では学部・学科により教科・科目数が減らされている。

**大阪医科大、関西医科大**がそれぞれ後期入試を導入する。大阪医科大はセンター方式の後期で5名、関西医科大は一般方式の後期で7名の募集で、入試科目は前期と同じである。後期入試を実施する医学部は数少なく、多くの志願者を集めそうだ。**立命館大**では文学部の学部個別方式の試験日選択ができなくなる。

## ⑥中国・四国地区

**広島修道大**（法一国際政治）でセンター併用入試を導入する。今春入試でも経済科学部、商学部と実施学部を拡大しており、実施しないのは法律学科1学科のみとなった。**日本赤十字広島看護大**では、大学独自試験で実施していた後期入試をセンター試験科目利用へ変更する。今春までは英語と小論文で選抜を実施していたが、センター試験の指定3科目となるため非常に申しやすくなる。**広島女学院大**（人間生活一管理栄養）はセンター方式A日程でそれまでの3科目型に加え、化学または生物のみの1科目型を実施する。

**広島国際大**（保健医療、総合リハビリテーション）、**吉備国際大**（地域創成農）では他学部同様のセンター方式を導入する。

四国地区では入試方式の変更や、入試科目の大幅な変更をする大学は皆無で前年と同様の入試を実施する。

## ⑦九州地区

九州地区の主要大学である**福岡大**医学部医学科でセンター方式を新規導入する。センター試験で4教科6科目、大学独自試験では面接と調査書を課す。また、工学部電気工学科ではこの学科だけ実施していなかったセンター4科目型を導入する。

**熊本学園大**では経済学部で入試方式を大きく変更する。一般方式の前期に3教科を受験し高得点の2教科で合否判定を実施するB方式を導入する。また、外国語学部英米学科、社会福祉学部福祉環境学科、経済学部経済学科、リーガルエコノミクス学科ではセンタープラス型も導入する。さらに商学部では税理士や公認会計士の資格取得を目指す会計専門職コースの募集を開始する。

入試の実施回数を変更する大学が2大学ある。**長崎総合科学大**は一般方式を前・後期の2回からⅠ～Ⅲ期の3回に増やし、**福岡女学院大**はセンター方式をⅠ～Ⅳ期の4回からⅢ期までの3回に減らす。

## ◆改組・新增設やその他の動き

### ①大学の 신설

大学の 신설は**日本医療大**（札幌市）、**京都看護大**、**大和大**（吹田市）の3大学が予定されている。日本医療大は保健医療学部看護学科、京都看護大は看護学部看護学科のみの単科大

である。大和大は教育学部と保健医療学部の2学部の設置が予定されている。

### ②学部・学科の新設、改組

来年4月開設予定学部・学科は、学部の新設が37大学41学部、学科の新設が38大学40学部57学科にも上る（8月末現在、河合塾調べ）。首都圏では**上智大**（総合グローバル総合グローバル）、**法政大**（生命科学一応用植物科学）、**早稲田大**（基幹理工一情報通信）が新設され、近畿地区は**京都産業大**が外国語学部の既存の学科を改組し新たな専攻を設置する。中部地区では**中京大**文学部歴史文化学科が新設される。

### ③看護、医療技術系、教育系の新設が続く

来年度も、ここ数年の傾向である医療系や教育系の学部・学科の新設が多くなっている。

なかでも看護学科は、前述の新設3大学での設置を含め全国の私立大だけで13大学で設置が予定されている。

工業大学にも看護学科が新設される時代になった。**北海道工業大**は看護学科の新設に伴い大学名を**北海道科学大**と変更する。**足利工業大**は「工業大」の名称のまま看護学科を設置する。工業系の大学に臨床工学技師養成や医用工学、福祉工学を学ぶ学科は存在しているが、看護学部を設置するのは珍しいケースである。医療技術系の学科では前述の北海道科学大には理学療法と診療放射線の2学科も設置される。その他の医療技術系の学科では、**日本体育大**が保健医療学部整備アスレティック学科、救急医療学科を設置し、柔道整復士と救急救命士の養成を目指す。**帝京大**は福岡医療技術学部に診療放射線学科を設置予定である。

教育系の学科も全国で13大学に設置される。**東京家政大**や**和洋女子大**は保育士や幼稚園教諭の資格取得を目指す女子受験生に人気を集めそうである。

### ④キャンパス移転

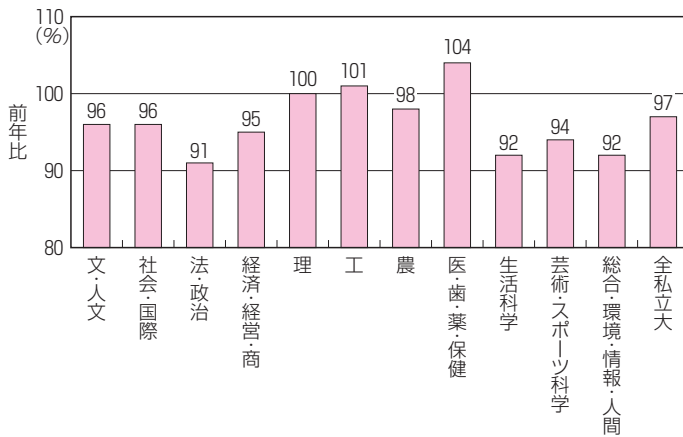
近年、キャンパスの移転や再編が相次いでいるが、来春も**実践女子大**や**愛知学院大**などで行われる。実践女子大は文学部と人間社会学部を日野キャンパスから渋谷キャンパスへ移転する。なお、日野キャンパスの生活科学部には現代生活学科を新設する。愛知学院大は経済、経営、商の3学部の2年次以上の専門教育を新たに開設する名古屋市内のキャンパスで実施する。

## ◆第2回全統マーク模試から見た志望動向

国立大学編でも述べたとおり来年度入試は受験人口の減少が見込まれ、第2回全統マーク模試の受験者前年比は96%である。私立大全体では前年比97%、方式ごとの内訳は一般方式が98%、センター方式は94%でセンター方式での志望者の減少が目立つ。

系統別の志望動向をみると、今春入試同様文低理高の傾向に変化は無い。**【図表6】**は私立大全体の系統別志望動向であるが、理学系100%、工学系は前年比101%と受験者の前年比96%を鑑みると増加といえる。医療系の高い人気は継続しており、医学系108%、薬学系107%、医療技術系104%、看護系102%となっている。今春入試とは異なる動きを見せているの

【図表6】私立大 学部系統別の志望動向  
(第2回全統マーク模試より)



は生活科学系である。志望者の前年比は92%と減少しているが、5月の模試では減少は見られなかったため、今後の動向を見守りたい。

文系系統に目を向けてみると、全ての系統で前年比を下回っている。特に目立つのは法・政治系で前年比91%と低調である。今年に入り法科大学院の募集停止が次々と発表されるなどあまりよい話題はなく、受験生離れが進んでいる。

次に各地区の主要大学の志望動向について見ておく【図表7】。北海道・東北地区の3大学はいずれも志望者を減らしている。3大学共通で経済学部の減少が大きく、**北星学園大**79%、**北海学園大**77%、**東北学院大**79%と前年比は80%を割り込んでいる。

首都圏では系統人気もあり、**東京理科大**の志望者が大幅に増加している。特に、募集人員の最も多い理工学部では志望者前年比118%と大幅増となっている。逆に志望者を最も減らしている大学は**法政大**で、グローバル教養と現代福祉学部で

は志望者増となっているものの、他の学部は全て減少している。特にキャリアデザイン(前年比73%)、情報科学(同79%)の2学部の減少が目立つ。

情報通信学科を新設し、系別募集に変更する**早稲田大**の幹理工学部は志望者数2,373人→2,802人と大幅増になっている。しかしながら文系学部の志望者が減少しているため大学全体としては93%となっている。同じく来春新設予定の**上智大**総合グローバル学部は、今回の模試では1,140人の志望者を集めている。

東海地区の主要大の志望動向は他地区に比べ好調といえる。ただし、**愛知大**は前年比92%で、ここ数年本番入試の志願者数の増加が続いていたが、今回の模試では志望者減となっている。

**同志社大**のグローバル地域文化学部は来年度入試からセンター利用方式を導入する。これによる一般方式の志望者の減少はほとんどなく、学部全体の志望者は増加している。他に増加の学部は文化情報学部、グローバル・コミュニケーション学部等である。**関西大**は文系学部で減少、理系学部で増加と私立大学の全体の系統の人気と同様の動向を見せている。目立った動きを見せているのは、環境都市工学部が志望者前年比106%と高く、法学部が同84%となっている。

九州地区の**西南学院大**と**福岡大**では方式により全く異なる動向を見せている。一般方式は増加または前年並みであるが、センター方式は前年から約1割減という状況である。

来春入試の詳細な動向は、次回模試の動向を踏まえて、本誌12月号でさらに詳細をご報告したい。

【図表7】主要大志望者数

大学名	一般方式志望者数			センター方式志望者数			合計		
	12年度	13年度	前年比	12年度	13年度	前年比	12年度	13年度	前年比
北星学園	1,547	1,365	88%	1,240	1,091	88%	2,787	2,456	88%
北海学園	2,926	2,567	88%	2,172	1,879	87%	5,098	4,446	87%
東北学院	4,072	3,670	90%	3,975	3,647	92%	8,047	7,317	91%
青山学院	25,079	24,920	99%	8,226	7,461	91%	33,305	32,381	97%
慶應義塾	28,563	28,027	98%	—	—	—	—	—	—
上智	19,289	19,454	101%	—	—	—	—	—	—
中央	21,445	20,682	96%	8,428	7,808	93%	29,873	28,490	95%
東京理科	11,874	13,222	111%	12,209	12,488	102%	24,083	25,710	107%
法政	28,852	26,173	91%	8,190	7,041	86%	37,042	33,214	90%
明治	44,229	43,471	98%	16,497	14,875	90%	60,726	58,346	96%
立教	26,114	25,607	98%	9,899	9,239	93%	36,013	34,846	97%
早稲田	53,588	50,526	94%	10,327	8,670	84%	63,915	59,196	93%
愛知	10,788	9,829	91%	3,042	2,914	96%	13,830	12,743	92%
中京	13,224	13,157	99%	4,356	4,379	101%	17,580	17,536	100%
南山	12,225	12,226	100%	4,279	4,400	103%	16,504	16,626	101%
名城	17,446	16,736	96%	4,382	4,343	99%	21,828	21,079	97%
同志社	25,682	25,483	99%	13,403	13,129	98%	39,085	38,612	99%
立命館	22,686	22,673	100%	18,993	17,102	90%	41,679	39,775	95%
関西	26,336	25,038	95%	10,131	9,347	92%	36,467	34,385	94%
関西学院	22,520	21,614	96%	7,009	6,510	93%	29,529	28,124	95%
西南学院	4,674	4,901	105%	5,216	4,644	89%	9,890	9,545	97%
福岡	15,039	14,675	98%	9,272	8,243	89%	24,311	22,918	94%

※第2回全統マーク模試より